

香川の希少淡水魚がおかれた厳しい現状 ～香川淡水魚研究会の調査に同行して～

「突然のメールで失礼させていただきます」。今年の春、香川淡水魚研究会（※１）の川田代表から一通のメールを頂きました。そこには昨年出版した本（※２）の感想と、香川県の希少淡水魚に関する状況が書かれていて、関心があるなら見に来ませんかという内容でした。

香川淡水魚研究会（以下研究会）の存在は知っていましたが、研究会が発信する生息調査や保護保全活動、香川の淡水魚に関する情報をたまにホームページで見えていたからです。メールを頂くまでは、ひとつの情報源としか捉えていませんでしたが、「半分あきらめを感じます」、「いいニュースはひとつもありません」という言葉がとても気になりました。文面に落胆と未来に向けた厳しさがにじみ出ていたからです。単なる淡水魚好きの私に何ができるだろうかと少し困惑しましたが、あれこれ考えずに、とにかく行ってみようと思いました。環境生態学を学ぶ長男と一緒に、５月の週末に実施される２日間の調査に同行させて頂くことになりました。

今回、要となる香川県の希少淡水魚は、ニッポンバラタナゴ、カワバタモロコ、カジカの３種です。いずれも日本固有で、香川県内の希少野生生物（絶滅のおそれがある野生生物）のうち、「特に保護を必要とする種」に指定されており、生きている個体の捕獲などが条例で禁止されています。ニッポンバラタナゴはかつて琵琶湖以西の瀬戸内平野に広く生息していましたが、大陸から持ち込まれた外来種のタイリクバラタナゴとの交雑が各地で進んだり、競争に負けたりして、一部を除き全滅しました。現在は大阪府八尾市や香川県などのごく限られた場所に残存するのみです。カワバタモロコも里のため池やその周囲の水路などに生息していましたが、宅地化による生息環境の破壊や外来魚による捕食などにより、本当に見かけなくなりました。国内希少野生動植物種に指定され、生息が確認されている全ての府県でレッドデータブックに記載されています。カジカは全国的には上記２種ほど激減している種ではありませんが、四国で現在生息しているのは香川県の１河川のみで、絶滅も時間の問題となりつつあるとメールにありました。

初日は、ニッポンバラタナゴとカワバタモロコを保全されている場所に連れて行ってもらいました。朝６時半過ぎに大阪の自宅を自動車で出発し、１０時に指定の場所で研究会の皆さんと合流しました。はじめて会う方ばかりでしたが、皆さん気さくで、とても暖かく迎えて頂きました。代表の川田さんは香川県希少野生生物保護推進員でもあり、高校の現役数学教師で生物部の顧問をされているとのことでした。生物部の生徒さん数名もご一緒でした。

「ま、ついてきて下さい」と言われ、行先も伝えられないまま、自動車４台で出発しました。先導車は市街地を抜けて山の方へ。そのうち１台がやっと通れるぐらいの細い道になり、クネクネ曲がりながらどんどん上り続け、やっと到着したところは、農家のお宅でした。屋敷の横には何枚もの水田があり、ため池が上下に見えました。それらのため池こそ、研究会と農家が協力し、２０年以上も前から隔離させた香川県産ニッポンバラタナゴ（遺伝子解析で純系と確認済み）とカワバタモロコを保護保全している場所でした。ため池は４つあり、その水は今も稲作に使われていると聞きました。近くで見ると、いずれの池も適度に放ったらかしといった感じで、水量は雨頼み、落ち葉や枯れ枝は落ち放題でした。魚の捕獲は練り餌を入れた網もんどり２つを投げ込み、２０分程度経ってから引き上げる方法で捕まえました。が、池ごとに個性があって、保全対象の両種の個体数には差が見られました。

上の方に位置する池（写真１）は比較的大きいので、両種ともにたくさんの個体数が見られると期待しましたが、捕れたのは、ニッポンバラタナゴのメスが数匹のみでした。同時にヌマムツとシマヒレヨシノボリも入りました。気になったのはヌマムツの存在です。表層付近にも大きなヌマムツが何匹も遊泳する姿が見られ、稚魚が捕食されてしまうのではないかと感じました。しかし、研究会は積極的に取り除くようなことはせず、もとの環境のままにしておられるようでした。

そのニッポンバラタナゴがたくさん捕れた池は、予想に反して、より小さく浅い池でした（写真２）。５月に入ってから雨が少なかったため、池の水が減り、底の一部が見えていました。泥を浅く掘ると、ニッポンバラタナゴの繁殖に不可欠な二枚貝、タガイが確認できました（写真３）。網もんどりを引き上げ、たくさん



▲写真 1: 上方に位置する１つ目のため池